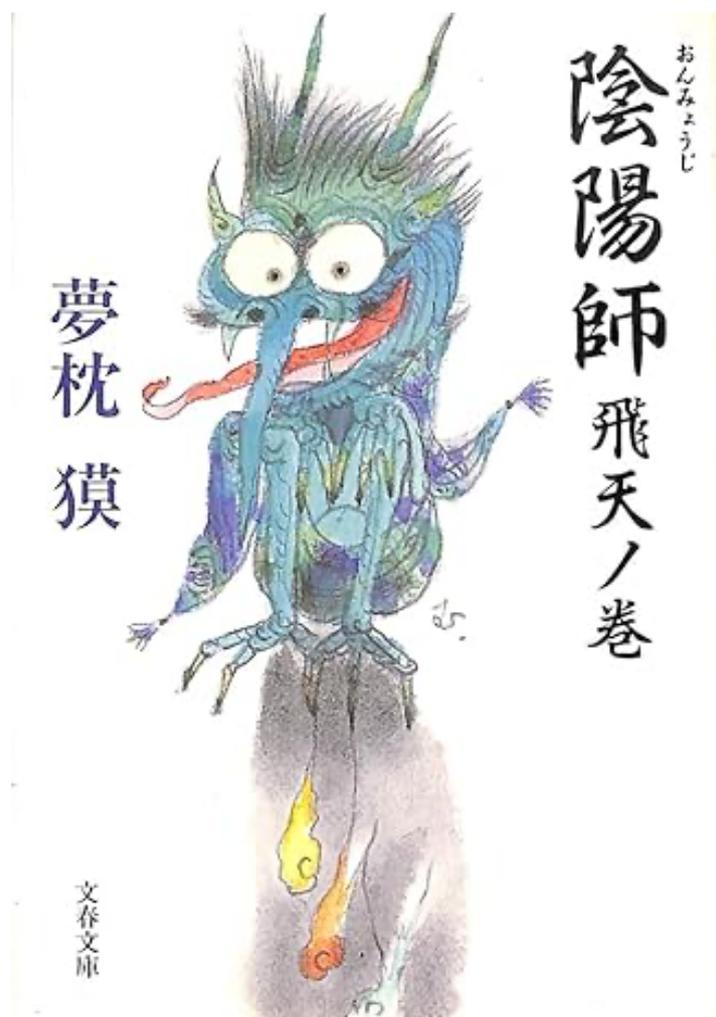


人が存在しなければ、神も鬼も存在しない…。

とは、小説「陰陽師」の安倍晴明が、無二の親友である源博雅との対話で発した言葉である。自然の猛威があろうとも、なかろうとも、そこに人がいなければ、災害は起こらない。地震に続いて豪雨に見舞われた、能登半島は、米作り、酒造り、塩作り、漁業の盛んなところである。

人は生きるために集まり、町をつくる。人が集まるのは自然の恵みがあるからである。そのこと自体はいい。しかしながら、自然の恵みあるところには必ず、それと裏腹に、自然災害の歴史があるといっている。そのことをみずして、恵みだけ享受し続けるということはない。



夢枕獏による小説・陰陽師

「陰陽師」で描かれる平安京は、当時栄華を誇った。現在NHKの大河ドラマの藤原道長が活躍する一世代前のころが舞台だ。ここでは、貴族たちがさまざまな怪異に見舞われる。その話が持ち込まれると安倍晴明は現地に赴き、何があったのかを調べ、怪異現象を解決する。怪異の元となる鬼を退治するのではなく、対話し、鎮めるのである。

このことはまさに人と自然との対話そのものである。いってみれば、陰陽師が属していた陰陽寮という役所は、自民党の総裁選でも話題にのぼった「防災省」のようなところである。そうした、国家として公式的な場、自然と対話する場はやはり必要だろう。その意味では、寺田寅彦師は、安倍晴明と重なってみえる。寺田師が遺した数々の随筆には、西洋科学を妄信し、そうした自然を対話する姿勢をなくしつつあった日本人への警鐘が書かれているのである。

師いわく一日本の自然はほとんど昔のままであり、日本の風土を自由に支配することは不可能である。それにもかかわらず、このきわめて見やすい道理がしばしば、忘れられる。  
(昭和10年、日本人の自然観)

(令和6年9月)